
とある戦国漂流

ヨッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある戦国漂流

【Nコード】

N2119Y

【作者名】

ヨッシー

【あらすじ】

ある日、上条は神奈川県にある新築の実家にいる両親に呼び出された。そこにタイミングよく学園都市第3位超能力者のこと御坂美琴が帰郷が重なる。二人はとある部屋で封印されていた巻物と刀を見つけて封印を解かれてしまった。その時、先祖の霊を覚め2人を戦国時代に飛ばしてしまう・・・だが、飛ばされた戦国時代の名高い武将たちはほとんどが女性だった・・・

始まりの家系図（前書き）

こんにちは！ヨッシーです！

最近、読んでいる小説で『織田信奈の野望』を読んでおりまして、禁書目録と合わせること出来るのでは・・・と思い、気まぐれで書いてみました！

初めは恋姫でもいいな〜〜〜と思いましたが、本郷がフラグを立ててしまい、上条さんの一級フラグ建築ができないと思い・・・時を戦国した女だらけの時代にしてみました！！

原作主人公の相良良晴も登場、二人の国取り・・・いや、旗取り合戦がここに始まります！

さて、上条当麻は戦国の世を駆け抜けることができるのか！！

では本編どうぞ！

始まりの家系図

始まりの家系図

とある住宅街

刀夜「お〜〜！当麻！帰ってきたか！！」

詩菜「あらあら、当麻さん、お帰りなさい」

当麻「あ……た……ただいま」

とある日……上条当麻は両親にいきなり呼び出され、学園都市から神奈川県にある実家に帰ってきた。当麻本人はあのインデックスの事件により記憶が消されてしまい、ふるさという気持ちが今少し湧いてこないでいた……

刀夜「ん？当麻どうした？なんだか他人の家に来たような顔して？」

当麻「あ……！悪い、父さん……学園都市にずっと暮らしていたからなんだか感覚がおかしくなってる」

詩菜「あらあら〜でもそうね。お家が新しくなったんだから仕方ないわね」

当麻「あははは・・・たしかにそうだね。母さん」

夏休みのエンゼルフォールの事件で新しく作った家は吹き飛んだが・・・最近になり再建が終了し両親はここで暮らし始めているのだ。

当麻「ところで父さん、母さん。こんなときになんで俺を呼んだんです？新しい家の紹介のためかい？」

刀夜「まあ、そんなところだ。久しぶりに親子水入らずの時間を過ごしたいからな！いいだろ。当麻？」

当麻「あ・・・ああ（やべ～～～俺、記憶ないことバレちまいそうだ）」

刀夜「よし、話は家の中でじっくり話そう！・・・お！」

当麻「どうした・・・ん？・・・うつ！？」

詩菜「あら？」

早速、新宅に入ろうとした上条ファミリーの目線の先には・・・！！

美鈴「どうよ。美琴ちゃん！久しぶりに帰ってきた実家の感想は！」

美琴「な・・・なにそんなにハイテンションなの？」

美鈴「ふふん～～それはね～～・・・あ！お～～い！」

美琴「ねえ、誰に手を振って・・・げっ!？」

美鈴「グットタイミングだったわね～～」

御坂ファミリーのお二人さん。なぜかこのタイミングで現れた！

美琴「なんであんたがいるのよ!？」

当麻「なっ!?!御坂!?!なぜここに!?!」

美琴「それはこっちのセリフよーーーー!!」

美鈴「うふふふ・・・当麻くんのご実家は実家のお隣なのよね～～」

美琴「ちょ!?!なんでそれを言わなかったのよ!?!」

美鈴「え～～～だって普通に言うのはつまらないでしょ?」

美琴「この馬鹿母・・・」

仲良くケンカする母娘を不思議そうに眺める上条家の一同・・・しかしそこに空気を変える漢が一人・・・

刀夜「お出かけの帰りですか？なら、うちでお茶でもいかががです？」

美鈴「あら、いいですね。お言葉に甘えさせていただきます」

詩菜「美鈴さんと・・・え」と、美琴ちゃんでしたっけ？」

美琴「あ・・・はい」

詩菜「遠慮せずにどうぞ。お入りください」

さすが上条夫婦、その場の空気を一瞬にして変えた。だが、当麻と美琴の空気は今だ暗い・・・

1時間後

当麻「はあ~~~~なんで大人ってあんなに話好きなんだ？それに・・・

はあ~~~~」

美琴「何私を見て、2度もため息してんのよ。」

当麻「いや、何となくしたくなった」

大人の空間から脱走した上条当麻は上条家の家を検索していた。美琴も一人でその場に居るのが耐え切れないため、当麻に付いてきたのだった。

美琴「で？これからどうするの？」

当麻「そうだな~~~~ここには初めて来たし、家の中を探索するか」

美琴「あんたの両親がここにきたのは最近ついていてわよね」

当麻「そうらしい。俺は詳しいことはわからんが、自分の家くらいは覚えておきたいし」

美琴「あ・・・あんた、記憶がないのよね・・・親に話さなくていいの・・・」

美琴は当麻が記憶喪失のことを知っていた。あの夜ときにはつきりしたのだ。暗闇の道で怪我のことを関係なく。仲間の助けに向かう上条当麻の本質と本心も・・・

当麻「言ったら悲しむだろ。それなら言わないほうがいいだろ」

美琴「でも」

当麻「俺はどれだけ傷ついていいが、他人が傷つくところは見たくないからいいんだ」

美琴「……………」

ガチャツ

当麻「ん？この部屋はまだ整理されてないのか」

美琴と会話しながら家の奥の部屋を開ける……中にはまだ整理されてないダンボール箱の山が連なっていた。

当麻「すげえ、ダンボール箱の山だな」

美琴「そうね。ホントに最近、引っ越してきたって感じね……そうだ！」

当麻「……………どうした？」

美琴「ねえ、ここにあなたの昔のことに関するアルバムとかありそうじゃない？」

当麻「ん……まあ、あるんじゃないかな」

美琴「なら、探さない？あんたの過去？」

当麻「え……」

美琴「べ……べつにあんたの過去に興味あるわけじゃないわよ！」

当麻「御坂……おまえ……」

美琴「な……なによ!？」

いきなり真面目な眼差しで美琴は少し赤面になる

当麻「そんなに俺の恥ずかしい過去を掘り出したいのか」

バチバチ!!

当麻「うお!？」

バキン!

当麻「凶星……かよ」

お約束の電撃にいつものように右手で回避する。長い付き合いのためか当麻は意外と冷静である。

美琴「ああゝゝもう、あんたは不自由と思わないの？少しでも昔のことがわかれば、あんたの両親を誤魔化しやすくなるでしょ！」

当麻「ああ！なるほど」

そんな考えが思いつかなかった記憶喪失の少年は平手に拳を叩き、納得する。

美琴「たく・・・にぶちん（でも、こいつの過去があるし・・・）」

「

理由はどうあれ、二人は部屋の中のダンボール箱の中を物色し始めてた・・・

数分後

美琴「なかなか見つからないわね」

当麻「まだ山（ダンボール箱）は半分も残っているな・・・正直だるい」

美琴「って、なんで私が本気で探して、アンタはやる気がないのよ！」

美琴が必死に探しているのに当麻はやる気なくダンボールの中身を
探す・・・

当麻「お!？」

美琴「見つかったの!？」

当麻「こ・・・これは・・・」

美琴「なに?何を見つけたの!？」

何かを見つけたようだが返答がこないため、ダンボールの山裏に
いる上条の所に行く・・・そこにはダンボールではなく長い木箱から
何かを取り出した上条の姿があった。

当麻「これ・・・って・・・日本刀だよな・・・」

美琴「ちょっと!ちゃんと探しなさいよ!」

当麻「ん?ああ・・・アルバムは見つからなかったが、こんなの見
つけた」

美琴「何?この古い木箱は・・・」

当麻「日本刀と同じ場所に置いてあった」

当麻の足元には日本刀が入っていたと思われる木箱ともう一つ、ものすごく古く鍵の掛かった木箱が置いてあった。

当麻「父さんが集めたお土産コレクション・・・にしてはかなり大切に保存されてたようだな」

美琴「へえ~~~~あんたのお父さんはそういう趣味してんの？」

当麻「まあ、夏のときの趣味の熱中ぶりには手が焼いたよ・・・色々と」

美琴「ねえ、その日本刀見せてよ。なかなかオシャレじゃない」

当麻「ちょっと待て・・・そう焦るな・・・って・・・うわ!？」

バキリ!

当麻「いてーーーーー!!」

美琴「ちょ!?!なに箱を壊してんのよ!？」

美琴が当麻の持つ日本刀を無理やり取ろうとした瞬間、当麻は転倒してしまい、足元にあった鍵付きの木箱に頭を打ち付け、箱は簡単に砕け散った・・・

当麻「いたたた・・・あれ？なんだこれ？」

今まで封印されていたものが姿を現した・・・

美琴「なにかの巻物？」

当麻「え~~~~と・・・『上条家系図』・・・って、え~~~~！！？」

美琴「なんかすごいものが出てきちゃわね」

当麻「と・・・とりあえず、中を確認しよう！」

二人は恐る恐る、巻物を開いていく・・・巻物にはまるで地面に根を伸ばすような形で枝分かれをするご先祖の名が刻み込まれていた。

美琴「へ~~~~あんたのご先祖さん、多いわね」

当麻「ええい、なんて長い家系図だ。俺って上条家の何代目だよ。わかりやすく代数を書いとけっつーの！」

ながいなが~~~~い家系図は数十メートルにおよびやっと、上条家を作った初代の先祖のところまでたどり着いた。

当麻「ふう~~~~やっと、初代か。さて、ご先祖様のお名前をはい

け……ん……. ちよつ! ? なんだよこれ! ?」

美琴「どうしたの! ? ちよつ! ? え~~~~~! ?」

二人はお互いに同じ反応をした。これを見て驚かないわけがない。

初代ご先祖……いや、上条家の総本山の名前が……『当麻』とクツキリハツキリと書かれている。

美琴「ちょ……これ何かの冗談よね?」

美琴はそれだけではなく。もう一つの名を見て、今まで味わったことのない衝撃を受ける……その初代当麻の妻の名前に『美琴』と書かれていたら、同じ名の人間が驚かないはずがない。

美琴「なんで……これって偶然にしては……. . . ちよつと……. . . あれ? 当麻?」

ガラ!

美琴「ちよつと!」

上条当麻「離してくれ! なんだか俺は死にたくなってきた!」

ちなみに現在上条たちがいる奥の部屋は実は2階部屋なのだ・・・
当麻はいろんな意味で現実逃避し始め、近くの窓を開け飛び降り自殺しようとしたが、美琴に羽交い締めで止められる。

美琴「だからって飛び降り自殺なんてやめなさい・・・って、それって、私と結婚したのがそんなにいやなのか。コラーーーーーー
ーーーーーっ!!!」

バリバリバリ!!

当麻「ぎゃあああああああああ!ふこっ~~~~~~~~だーーーー
ーーーーッ!!!」

美琴の逆ギレで思いつきりの電撃を食らう上条当麻!

ちなみに上条がいきなり思い切った行動に出た理由は美琴という名が書かれていただけではなく。その初代は妻が複数おり、かすれて読み取れないが・・・

美琴

火

―和

or—— などなど

身に覚えがある名前の部分と完璧な外人だが、なぜか知っている人物に近い名がズラズラと巻物からはみ出しそうに書かれている。確認できて数十人！まるでどこぞのお殿様！

まるで未来の自分が鬼畜道に落ちるような予感がして、現実から逃げたくなったというわけ……

数分後

当麻「ま……まだ痺れが抜けない……」

美琴「ふん！自業自得よ」

当麻「何怒ってんだよ」

美琴「べ……っ……に……」

美琴さんはまだ機嫌が治っていない。当麻はなぜ起こっているかは解るわけなかった……

当麻「え……と、初代の上条当麻は……誕生日は不明……死没が慶長3年8月1日……けいちょうって、いつだったけ？」

美琴「慶長は1596年〜1615年の元号のことよ。簡単に言えば戦国時代の末期か江戸時代の初期よ」

当麻「ふ〜ん、上条家は戦国時代からお家が始まったのか・・・」

美琴「ねえ・・・」

当麻「どうした」

美琴「あ・・・あんたって、もし、初代のご先祖さまと同じ名前の女の人と・・・け・・・結婚するって話になったらどうする？」

ドドドド！ガラ！ガシッ！

美琴「なんで返事じゃなく。行動で示すのよ！」

当麻「逝かせてくれーーーーー！！俺は鬼畜道に堕ちたくなー
ーーーーーッ！」

言葉ではなく行動で示す上条当麻の飛び降り自殺は美琴の的確な行動により阻止することができたのだった・・・

また、数分後

当麻「まあ、そんなわけで探索はこれで終わり、下に戻ろうぜ」

美琴「うん」

当麻「あ・・・あれ？」

美琴「どうしたの？」

当麻「ドアが開かない」

美琴「ちよっ！？それどういうこと？」

ガシャン！ガシャン！カチャツ！カチャ！

当麻「あははは・・・美琴さん？冗談抜きでいたずらは止ましようや？」

美琴「そ・・・それはこっちのセリフよ！あんたこそ、窓は自動ロックってことは先に言いなさいよね！」

当麻「え？窓にそんな高性能な機能はないはずだぞ」

さっきまで空いていた窓がいきおいよく閉まり、鍵が勝手に掛かっていった・・・当麻の言うとおりこの家には自動ロックという高性能なモノはこの部屋には存在しないのだ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガタン！シャーーーーー！！！！

美琴「きゃあああああああ！！」

当麻「な・・・なんだ！？」

いきなりカーテンが閉まり、部屋の中は暗闇になった。

ガタン！ガタン！・・・・・・・・

美琴「ね・・・ねえ・・・さっきいた場所から音が・・・」

当麻「か・・・確認するしかないよな・・・」

二人は先程いた場所に行ってみる。そのとき、美琴はガタガタ震えながら上条の腰に張り付き、どこぞの小動物のような感じをしていた。

ガタガタガタ・・・

音がするのは上条家家系図の巻物の木箱の横にあったという日本刀の木箱から音がしているのだ。

まるで外に出たがっているような音を立てていた。

美琴「ちよつと！危ないわよ！」

当麻「中を確かめないとわからねえだろ。もし魔術たぐいならすぐに対処出来るし」

美琴「魔術・・・ってなによ」

そんなこんなで当麻は日本刀を元に戻した木箱の蓋を開ける・・・しかし、中身は今までと変わらず綺麗に保管されていた状態・・・

何も変わっているところはなかった

当麻「何もないな・・・」

美琴「あれ？蓋の裏に中貼ってあるわよ？」

当麻「はい？」

たしかにそこに紙らしきものが貼ってあり、何か書いてある。

当麻「ぶは！？行書体かよ！？か・・・解読できねえ～～～～」

美琴「たく、高校生なのに読めるように勉強しなさいよね。え～～と」

封印を壊し運命を変えるそのお前！、お前は妖刀『幻破』を扱う資格ある。この俺、上条当麻に代わり戦国の世を駆け走り、上条の礎を築きやがれ！・・・ちなみに拒否権はねえ。もし、抵抗もしくは逃げだそうとするならお前とその周りのモノも一緒に吹き飛ばす！
ーーーーーす！

初代当主 当麻

上条家

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

美琴「あ……あなたの先祖さまって……色々面白いこと書くわね……ってなにこれ！？行書体だけど、現代文！？」

当麻「とにかく、早くここから出るぞ。御坂！窓割つても壁こじ開けていいから早くここから」

美琴「そうね。色々やばそうね。新築した家を傷つけることになるけど」

当麻「構わない。学園都市第三位のレールガンの力を使つてでも逃げ道を作ってくれ！」

美琴「あなたの右手は使えないの！？」

当麻「ぜんぜん右手が反応しないだよーーーー！！」

美琴「仕方ない。ちょっと出力が高いから余波に気を付けなさいよ！」

バチッ！ バーーーーキン！

美琴「ちよつと！？なんでレールガンが使えない！？あ・あれー
ー！？電流が出せない！？」

当麻「まさか……この部屋全体が幻想殺しに似た空間になっ
てるわけ！？」

気づいた時にはすでに遅し……この部屋の鍵が全て締まった瞬間
からここは超能力や魔術が効かない結界になっていたのだ

「拒否権はねえと書いたはずだぞ」

美琴「ちよつと、なに変なことを言ってるのよ！」

当麻「おれじゃねえ」

「とつとと仲良くタイムスリップしやがれ！！」

その瞬間、部屋を中心にブラックホールみたいな穴が周りのものを
吸い込み始めた。

美琴「きゃあああああー！！」

ガシ！

当麻「御坂、絶対に手を離すなよ！」

美琴「分かってるわよ！だから、絶対に手を離さないでー！！」

吸い込まそうになった美琴をギリギリキャッチした当麻だったが、体勢的にかなり苦しい形となり、今にも吸い込まれそうだった。

ずる・・・

美琴「きゃあああああああ・・・」

当麻「みさかー！ー！ー！ー！ー！ー！」

とうとう手が滑り、美琴は暗い光を放つ穴の中に吸い込まれていた・・・

当麻「チクシヨー！ー！ー！ー！ー！」

漢、上条当麻！女の子一人を犠牲にしてまで逃げようと思わない。当麻は自ら穴の中に飛び込もうとする。

「忘れ物だぞ」

当麻「うわ！？刀？」

「それはお前のモンだ。あっちでうまく使えよ」

上条の手に飛び込んできたのは妖刀『幻破』・・・そして、飛んできたところに誰かが立っていた。

当麻「あんたが俺のご先祖さんか！何でこんなことすんだ！」

「こついう定めだ。まあ、適当に恨んでくれ」

当麻「くそ！御坂が吸い込まれていなければ、こいつの幻想をぶち殺せたのに・・・」

「・・・あ！言っておきたいことがあった。」

当麻「ん？」

「あのお嬢さんと将来のお嫁さんとお幸せに・・・後、子供いっぱい作れよ！」

当麻「てめえーーーーの幻想ーーーーぶちこwあああああああ

あああああ！！」

そして、上条も完全に吸い込まれ、穴は閉じていった……

「さて、戦国時代でもうまくやれよ……お二人さん……直に仲間が来てくれる……」

そして、ご先祖の霊の姿を消し部屋は元の形に戻っていった……

続く……

始まりの家系図（後書き）

今回は上条当麻が飛ばされて終わりました・・・

次回から本番！戦国時代に飛ばされた当麻と美琴！二人の運命はいかに・・・

では、次回も楽しみにしてください！

ご感想なども受け付けておりますので、気軽に思ったこと書いてもらえると嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2119y/>

とある戦国漂流

2011年11月4日16時22分発行